

栃書連会報

あ る 話

白 石 宙 和

今、一つの古典に手を染めています。もう少しで二年になります。しかし、さっぱり捉えきれないで困っています。鑑るごとに、習う度に、だんだん遠のいて行くような気がしてなりません。やっぱり古典は偉いものだとしみじみ思います。いろいろな方の臨書も、随分見せてもらいました。が、それぞれに特色（一長一短？）があつて素直に納得できないのであります。そこまで自分の眼も技もまだ届いていないのでしよう。アセリも感じます。哀れさも味わいました。能力の程度なのかも知れませんが、工夫の仕方にも、いろいろあるんでしようが、これまで試みた限りでは、余り効果があつたようにも思えません。又、長い年月をただ続けていけば好いとい

うものでもないのではしよう。なかなか思うようには参らぬものです。タメ息をもらす毎日です。これに加えて展覧会がまことに多いのです。この頃では展覧会が主役で、すべてを引っぱっているみたいですから。ために、毎月のようにその制作に追われっぱなしです。それで、これまで多少はあつた蓄えも、すっかり底をついてしまつて、種切れの現在です。それでも展覧会は次から次と押し寄せて来ます。おつき合ひの応接にも忙しいのです。ちよつと立ち停つて、反省したり、充電したいと思つても、全然、許されないので。こんなことで、よい筈がありません。わずかの時間を割いて手がけてみた古典も作品には活かされないのです。じつくり温めた、作

品らしい作品など望むべくもありません。いつも、かりそめの仕事、その場のがれの仕事、不本意な仕事、いつわりの仕事に終始しているこの頃です。非力が更にヤセ細つて来ます。栄養を補給することが出来ないのですから。社中を抱える方は、自分一人のことにとどまらず、その度に「手本書き」に追われて己の仕事どころではない有様と言います。どうしてこんなことがハヤルののでしょうか。いつの頃からこんな姿になつたのでしょうか。これではマルで膨大な事務量を処理することに似ています。書は、本来、たしなむもの、作品制作のために、それぞその過程で苦しむもの、やがて生れる作品に期待を寄せて、その苦しみ

第 3 号

栃木県宇都宮市花房3-2-25
TEL (0286) 34-0622

〒320
栃木県書道連盟
会長 堀口 七郎
編集 堀口 七郎
印刷 ショウワ印刷(株)

を、かけがえない喜びに替えることができたのです。それが最近では、山積された事務処理のために喘いでいるとしたら、書に求めて本来のものとは凡そ異つたものになつていないでしょうか。一体、これからどうしたらよいのでしょうか。気の遠くなるような感じですが、こんな話をした人がいます。どう解決したらよいのでしょうか。展

(83・6)

祝 受 賞 !!

左記三人の先生方が表彰されたということは、本会にとつて誠に栄誉であり、会員一同心からその喜びを共にしていただくことができた。

◎下野県民賞

本会顧問 川俣古舟先生

下野新聞社が、本県における芸術・教育・産業・福祉等に顕著な功績をのこした方を表彰するもの。昭和五十八年三月十四日表彰式。

◎栃木県芸術文化功労賞

本会副会長 中井史朗先生

書道芸術の教育に多年にわたり大きな功績をあげたというこで、昭和五十八年五月十九日、栃木県教育委員会より表彰された。

◎栃木市市民賞

本会運営委員 池沢畔蒲先生

栃木市における文化の振興に大変貢献された方に授与されるもので、本年がはじめて。昭和五十八年六月二十六日表彰式。

第36回

栃木県書道連盟会員展批評

昭和57年7月2日～4日

栃木会館上・下ギャラリー

批評者 浅香 鉄心氏

阿部 塘蒲氏 古筆を大切にしてくくと意味あいでは、いい作品だ。こういうものを骨格として、どういうふうに関連してゆくかが課題だ。小字、中字引きのばしながらという抵抗感をだしながらやってゆくか、冒險を。針切、継色紙など稚拙感のさせるものを。きれいであればいいと言うだけでは駄目だ。展開を。

赤沢 豊氏 センスのあるいい作品だ。人の物をぬすむ物の見方が大切。どこがどういいのか。消化して自分のものの考え方で発表している。人に見せることが、作品の使命感だから、文字を羅列しただけではどうにもならない。鑑賞にたえるというところ、他の人の作品からいろいろと学びとることが大切。

穂山 玉星氏 なかなかいい。「山」いい。「滝の音」の部分が生だ、問題。印を少し左へ離してほしかった。

新井 幽秋氏 石井雙石は非常に落趣あるいいものを書いていて。下部の黒、よし。線、切れている。よし。上部の縦線をもっとびしっと。息切れしている。まとめ、全体の構成、側款、よし。

新井 幽石氏 変化をだそうとする気持、趣の感触はいいが、「そんなよう」がいただけでない。一番いいのは、落款の幽石書。

荒牧 桂舟氏 多行間の作品は、行間処理がむずかしい。二行目でへまをやってしまった。無造作に書いてもいいが。大胆な手法、中にいい字がたくさんある。数多くの作品を鑑賞し学んでほしい。どう処理しているか。半切だから一まわり小さく書けばもう少し文字が大きく見える。

井沢 桂秋氏 苦労した。どう変化させたら見てもらえるかが前提となっている。もつと自然に。無理をせず、静で始まって動でしめて、静で終るのが作品

を作ってゆく感触だ。抒情的。もつと字数のあるもの、十字程度書いたらよかった。

石田 鶴邨氏 針金をのばしたり、曲げたり、変になってしま

うのか。基盤が呉昌碩なら重量感をもつとだしてほしい。ゆつたりと、ねばっている感じでないと駄目。そのためには、字が

一まわり大きすぎる。余裕をみて字の大きさをきめ、まとめること。

岩沢 松涛氏 一本調子。どんなに変化させてもよいが、必画

は大切に。「柳」。

白井 仙道氏 お化けみたいだ。墨をもつと考えてほしい。格調、品位も考えてほしい。苦しい線の連続だ。趙之謙の味あり。

小野 蒼源氏 篆隸をやっているか？ もしやっていないければ

一人よがりになってしまう。作品として見せようとするかまえばわかるが、何となく、作品が

散漫な感じ。ぐつとくるものがない。裏打ち、お粗末、十分に

意を尽してほしい。作品も切り方、はり方、曲っている。

大浦 舟人氏 これはいい。若いのに立派。松下芝堂の調子だ。

抒情、豊かさがあがり、筆の先をきかして成功。

大谷津紫水氏 なかなかこの大きさ

はやさしいようでもうずかし

い。非常に呼吸を長く、うまく処理している。よろしい。落款、印の位置、一類、上にすればよかった。動きも大きく結構だ。

生沼 冬情氏 隷書の書き方を心得ている。楊見山の調子にみ

える。ある部分、骨力あつていい。特に気をつけるべきところ

一番目立つところで気がぬけてしまった。そうならないように。

落款は本分にあつた調子で書いてほしい。さびしい。

乙川 玄洞氏 やりすぎの感あり。虚画の処理ができてない。

目立ち過ぎる。紙の大きさに対して文字も大きすぎ、字数も多

すぎる。二まわり小さく表現してほしい。

加藤 聴空氏 筆、立っている。のびすぎ、縦に縦にいつている

から、全体的にひ弱な感触になつてしまった。これの半切な

ら二まわり文字を小さくすれば効を奏するのではなからうか。

柿沼 翠流氏 ポリウム感あり。いい作品だ。打つてでく

るものあり。

粕谷 東峰氏 大道芸人のよう

だ。風がまえの二画目のはね、やりすぎ、これは虚画であつて

次につづくための動きであつてほしい。落款、一寸大きい。空間はいい。

川合 峨山氏 見る人をして、嫌味を感じさせない。「おいこむ」の部、なかなかうまい。紙の大きさに対し、字の大きさ、非常にいい感触、あかぬけしたいい作品。

川島 汀蒲氏 若い女性らしいものを、自分なりの体臭で表現すること。もつと優しいものを。一枚の紙に一行、五字書けばもつと変つたものになつたろう。根本的な発想が間違っている。

木曾 梅邦氏 かなり手なれた書き方、ムードがある。やりっぱなしの部分が多い。無責任。上げた下げた、墨が入つたところ甘くなつてしまった。部分的にかなりうまい。

菊池 茅屋氏 手なれて、何回も書かれていた詩。河の「さんずい」も、点はずたなくともよい。一字一字の必画を大切に。菊地 春水氏 間を生かしている。五言、七言律、半切に入るのは、むずかしい芸当だ。引っぱるのが多すぎる。明るくてよろしい。

倉沢 竹邨氏 一寸やりすぎ。大きい字で墨を入れないで、小さい字で墨を入れるとよい。自己満足ではない。作品の一つの定石をふまえ、そこからどう展開してゆくか。墨をつけるか、つけないかということによつて変つてくる。

兼目 悠久氏 文字が大きい。「悠久」の落款も邪魔だ。印の崩し方、要注意。

小滝 きみ氏 非常に明るくよい。部分的によいところ、悪いところが入り混っている。

「ひかり」と「余分な線の部」

小林 翠香氏 きれいすぎる。

「寸松」はもつと濃がある。線は太く、墨量がある。わび、さびのある朴訥さをとらえてほしい。

小森 梅寿氏 手なれた筆法。線の省略に問題がある。「金」へんでなく、「食」へんになつてしまった。線の省略の場合、阿吽の呼吸を大切に。

斎藤 笙風氏 大きい文字の部分を渴筆にしたのはよい。印が大きい。四分位のものを。

沢田 幽石氏 二字でこれだけ書けばよい。こもっていい。線の質が単調で、一本調子。

重原 聖鳥氏 洒落た作品だ。一字の中で、行、草がないのがよい。全体的に明るく書けている。筆の使い方が全体的に平易だから、もう少し枯渇したところと潤筆のところと立体感を出してほしい。

篠原 珠簾氏 前半よい。下の「雁行」の部、窮屈。上部がよい。特に「紅葉」、すっきりと

していい。「一行」一寸甘い。

柴田 歌舟氏 一つ一つぼつんぼつんとなつてしまった。縦に気持をつないでゆくように。字を二まわり小さくして、一筆で五〜六字をつづけて書いてゆくように。

白井 薫苑氏 文字が大きすぎる。中の行間がないのは作品を窮屈にしよう。「聞」の耳の部の崩し方、「中」に見られてしまう。

白石 宙和氏 本文より落款の方が素晴らしい。呉昌碩の石鼓文あたりをやられるといい。息切れた線が見られる。自分の振幅の中で、レパートリーの中で知っていたらよい。落款の調子で作品を書いたらよかった。

早乙女晃楓氏 肩の下つた文字はやめた方がよい。自然のリズムで書いていつたらよい。目の高さになるところを注意してほしい。

田島 芽甲氏 楽しんで書いている。相当書歴のある人と感じる。めずらしい「花」だ。落着いた感じいい。「夏」むずかしい。

田嶋 青龍氏 あかぬけしていい。悪くはないが？熱血感あり。見せよう見せようとする部分が多すぎる。半切程度なら

静かに自然に書いてゆけばよい。

田中 曉亭氏 最近こういう楷書作品、少なくなってきた。貴重な存在。作りすぎているが、欧陽詢の調子よい。筆耕屋が書いた感じあり。白黒の反転で、それと同じく書くというのをはずすこと。肉筆で書いたという感触がほしい。作られた筆勢が目につく。もつと自然に書かれるとよい。

高橋 竹瑞氏 半切にこれ程の字数をよく書いた。しかし焦点がない。作品のポイントなし。一本調子。どの字にも変化はあるが。全部変化があるというところは変化がないのと等しい。変化のない字があつて、変化のある字があつてはじめて、全体的に変化が生じてくる。

館沼 天游氏 気迫が大切である。力の抜けた線を書いたのは駄目だ。西川流は気骨一辺倒で書かねばならない。謙慎の字はこれでもかと骨格を大切にしている。力、骨格の抜けたものは駄目だ。

田村 雅春氏 苦労したようだ。細線で見せる作品は線が大事。唐紙を用いず、白い紙で。自分の線が弱かったら色紙を使ったら。関西の人、色紙が多い。関東に比べ、浅っぽい。だから色紙があう。自分の弱さをカバー

している点では色紙を用いているのは成功しているが、本質的に翠軒調は線のひびきで見せるのだから、白い紙に堂々と書いたらよい。下の方がよい。線が大事。

津久井汀舟氏 落款、章法よろしい。横の同じ長さの線が目に入ってくる。下部だけでなく、頭の方にもアクセントをつけてほしい。さりげなく書いた部分の方がよい。本質的なものが大事だ。造形的なもの、配列の上で頭を使いすぎるとかえってそこがひっかかってくる。

塚本 龍涛氏 字が細かいから、筆のかえしの部分がやや骨折っている。部分的にいいところあり。うまく入っている。横ものは行間処理がむずかしい。

手島 映次氏 面白い。墨色、よくない。ねらいはわかるが。「平」が一番よい。他、やや甘い。古墨と紙のあわせ方がむずかしい。全体が「平」の調子ならよかったのだが。

塚本 瑞峰氏 手なれている。非常に作品のおさめ方うまい。下部はそろわぬ方がよい。変化の意図はわかるが。

豊田 静迪氏 静かな作品。せめて落款でびしっとしめてほしい。字はいいが、頭でつかち、しりつばみにならないように

に。

高橋 深秀氏 緊張感あり。落款の押し方、意図的にやったのか。一考を要する。書き出しの余白、あまりすぎ。

中井 史朗氏 淡墨の潤みが生きている。墨と料紙との関連、大切。最敬礼して拝見。年配で、芸として見せられる作品。小さい大きいでなく、格調、品位など見せ場をちゃんとあらわしている。

中津原軒陽氏 苦しんで筆を使っている。字の大きさ、よし。これだけ抑揚の筆を使いこなせるなら、もつと李嶠詩を勉強し、生でずばり出した方が成功した。一字あてになるということは、連絡して楽しむ場合、書き出しのところに全部、墨が入って、面白くない。呼吸が短いということ証明している。墨の入れ方が全部同じで変化なし。

中野 永峰氏 何を考えて書いているのかわからない。良寛、鉄斎などに倣しているのか。無法の法をねらっているのか。書はどう書いてもよいが、自己満足だけでは駄目。見えるだけの価値感がどこにあるか、ということを知っておかなければ。稚拙感を出そうとしているのだから、止むに止まらずそこにだててくるものが良寛であり、鉄斎

である。
長沢 瑞祥氏 これだけの字数をそつなくまとめている。一番目立つのは行間の芯が曲つていいる。三行が全部、中心をはずしている。真直ぐに書く必要はないが、あえて行間を曲げる必要なし。必然性がほしい。全体的に固い。
長嶋 石城氏 われた線、うまくわれた。さらつとしたいい作品。印の位置、一考を。
七海 水明氏 「叢」に無理がある。他の三字、びつくりする作品。展開にまねのできない素晴らしいものあり。
生田目史雲氏 一字目よし。「静」の終部、惜しい。
成田 穂州氏 墨色がでていない。「碧」の石の部分、まずい。一画余計。名前が全く違う。余白があきすぎた。
西脇 紫竹氏 草書にしては固い。全体的に一貫して普通に書いてゆくこと。見せよう見せようとしている。そう思わないで書いてほしい。自然に書いてほしい。
羽鳥 龍峰氏 やつぱり目立つ。次に移ってゆくかまへ。全体の中で一本か二本程度に力が抜けてしまっている。
人見 翠苑氏 「煙」、普通に書いてらよい。めずらしい文字

を書かない方がよい。一般的なもので書けばよい。同じ文字が二つ三つでてくる場合には、変化をつけるのに用いるのはよい。異体文字は使わない方がよい。二行目、なかなかよい。
本多 雨情氏 歌を散らし、如何に変化させるか、そういうためにする変化は人に打つてこない。全体を一作とした場合、文字をどう入れるかで苦労している。普通に書いていて見せられるとは何であろうか。色紙四枚、連作としての感覚が不足だ。全体のまとまり、一作として生きているか、死んでいるかが問題だ。変化のために変化をさせないのが大切だ。素直に。
増淵 硯水氏 ほめられたものでない。筆、やりつぱなし。行つてかえる構えがなければならぬ。もっと静かき、粘着力、ほしい。一本調子すぎる。
増淵 春雪氏 粘着力、やわらかい筆を駆使しながらゆつくりとした呼吸あり。飛白をあまり頭におくと、ワンパターンの生き方だ。墨色の潤濁の変化は当然のことだが、全体の中で山をふんでいるかどうか。縦にくる呼吸の流れがでてきた方がよい。
村田 幽香氏 いい。筆立っている。繊細な筆が入っていて呼吸が長い。すがすがしい夏向き

の作品。最後、もつと文字を小さく静かにおさめること。
村松 太子氏 落款を入れる場所、苦勞のあとが見られる。印のみでよい。「楽」の長画の起筆部が邪魔している。なかなかよい。極の扁から旁への部のひっかけ、問題だ。一字の中で、行、草がごっちゃになっている。
山中 香葉氏 消化不良のところあり。ここで盛りあげようとする法、おさめもうまいし、墨のつけ方いい。潤濁のかまへ方よし。全体のおさめ方よし。落款やや問題だ。
和氣 良克氏 豪快の中にも繊細さ、やわらかさあり。若い方がいい作品だ。強弱、粗密、紙面処理、見るにたえる作品。ただ下部の空間多すぎる。切つていい。二字のむずかしさ、線のひびきよし。
渡辺 游竹氏 宮下先生の影響か。字が並んだだけで、連綿が、全体的に固くて、縦に流れてくる緩急、粗密の呼吸の流れが不足。縦線が死んでいる。草書が多いわりに、点画が多すぎる。線の省略化に草書の意義がある。松本芳翠をねらっている。文字の大きさ、二まわり位小さく、文字の大小の変化を。
斎藤 松峰氏 文字を素材とし、

よめるか、よめないか、いいか悪いかという次元はおのずから異なる。よめないけれども心にひつかかってくる。本質は何か。会津八一のような、ふわつとした雰囲気、しかし線が死んでいる。線がひびいてこなければ。最後が山になつていいるが、もつと静かにおさめてほしい。呼吸の緩急、あつてほしい。
桜井 敬朔氏 よめない。漢詩をよむよりむずかしい。よめるよめないは問題でない。二次的なもの、近代詩文の方がよめない。本質的なものは、書は一体である。なかなか気合がかつてよし。文句もよし。よめなくともよいと思う。自分の体臭をだしてゆくこと。気骨あり、小さくても、好きな作品の一つだ。
松本 宜響氏 ムードものを書いてはいけない。たださつた線だ。骨格のある線は一本位しかない。古文、篆を書く場合、淡墨で書くのはよくない。うまいまとめだが何か物足りない。迫つてこない。力はあるが骨格不足。手なぐさみになつてしまふ。
百目鬼 賢氏 二行とも下部おかしい。一筆で全部書けてしまふ。漢字でもかなでも、書き出しから渴筆はない。もつと普通に書いてほしい。初めから渴筆

でという意図がみえみえだ。
川俣 古舟氏 筆のやりつぱなしがない。気が全部に入っている。小品には小品の格調、品格、見せ場がある。
 文責者 大谷津昭男

新会員紹介

林 農 葉	山根 和 夫	高橋 米 吉	相馬 猛 雄	板山 不二男	吉田 友 一	江 連 基	大平 成 孝	谷古宇 誠 次	手塚 義 市	矢内 重 臣	矢内 幸 子	吉田 諄 則
-------	--------	--------	--------	--------	--------	-------	--------	---------	--------	--------	--------	--------

受賞者

連盟賞を受賞して

柿沼 翠流

「日の光しずかなる日に白河へ越えゆく道をわれも歩めり。」茂吉の歌を知った時、この歌をいつか筆にのせてみたいと衝動が走りまわった。しかしながら感動や衝動だけでは作品は生みだすことはできませんでした。「素朴に深く」と意欲はありましたが何としても技術がとれないままに止まりました。反古を重ねて、表具

——実技講習会に参加して——

酒井 真沙

- 大平山濤先生講話(二月二十日)
 ・大正五年 富山県に生まれる
 ・金子鷗亭に師事
 ・日展評議員
 ・毎日書道会評議員
 ・創玄書道会副理事長
 ・抱山社主幹

◎「近代詩文書について」

店のメ切り前日に研究会にもついでいて酷評をうけてアウト、殆んど徹夜で、しかも表具師を待たして書きあげた作品に連盟賞の受賞、まさに「青天の霹靂」と言うのでしょうか。今回もまた素材に負けてしまったと言う感がつよく残ります。最近、書のむずかしさを少しずつ知りはじめました。目下、漢以前のものに興味をもって勉強しております。いつの日か、この連盟賞に値する仕事をしておれにかせさせていたきたいと願っております。私を育ててくださった、酒井真沙先生、中井史朗先生に紙上をおかりして御礼申し上げます。

感動を筆にたくし今の書をかかない限り書に親しみを感ずるようにならないでしょう。

作品が読めるということとは大切な書の要素の一つです。

視覚に訴えられてくる感動(線質)が中心になつての書の美)しかも読める作品でありたいものです。

※古典——電波になつて伝わってくるものをもつ。

長い間良い書とされつづけているもの。

・六朝の書(造像)
 (健康美(仏像と書がマッチしている(気持・感情・願いが刻みこまれている))

・王羲之・空海の書(草稿・手紙そのものに名品が多い)

(言葉と書くものが一つになつてい)

・うまさ器用さにとらわれてはいけない。

・憧れをたたなければいけない。たたなければ進歩発展しない。

・いいものは研究し、それいかに現代に生かすか。

◎少字数書(象書)
 ・文字が読めて、造形性が、

◎近代詩文書
 ・中味が読める、生命がなければならぬ。

・発想—エスプリがないとダメ。

・素材
 ア、自然の景勝

← 感動 ↓ 言葉
 イ、詩文そのものを読んで

← 感動
 (体と心と言葉がとけあわないと書けない)

※現代性
 (自分自身が現代的でなければならぬ)

(書家は骨董に住むな)
 (感覚をやしなうよう努める)

(書は感動が主体である)
 (今に生きている書を)

(単純化・省略化が大切)
 ※現代性に支えられた近代詩文書

新しい言葉があるから現代性があるとはかぎらない。

言葉と気持が一致するから現代性が出る。

現代性に与えられた庶民的な書を目指し「読める書」

「現代人に親しまれる書」としていいよ近代詩文書の道を掘り下げて行きたいものです。

◎大平先生講話)——
 先生が実際に筆を執られ書きながら全体の構成について指導

されました。

・量感・リズム・余白
 ・デフォルメ・主題と形式
 ・線質と形(情感をこめる)

・線自体に表情をもたせる工夫が大切

※余白・線質・構成三位一体となつて作品となる。

※漢字と仮名の調和
 漢字に仮名のリズムと叙情性を加え、仮名に漢字の骨格と構造的厚重さを加え両者が自然に融合することが大切です。

※近代詩文書においては特にリズムが重視されると思います。リズムによって作品が息づいてき命が生じてきます。

先生のリズムにのつた筆さばきを見せていただき書はリズムであり気合であると思いました。

◎受講生の作品批評
 先生は終始受講生作品の良い点を探しはげましの言葉をかけられておられ人間の温さを感じました。

実際の作品を通して余白美・線の表情・リズム・文字の組合わせ・形式・用具・墨色・力感・詩情等について指導くださいました。

大変勉強になりました充実した一日を過ごしたことを感謝致します。

第九回県美術展より

第九回展の審査は十月十八日(木)の十時から県立美術館で行われました。

白石宙和・高橋昇一・百目鬼賢・長嶋石城の四先生と私の五名が審査に当りました。

審査に先立つて、まず漢字創作・漢字臨書・仮名・近代詩文・篆刻・刻字等に部分けして、鑑別審査にかかりました。

審査というものは、好き嫌いで当るものではなく、極めて広い視野・見識で、作品に対処すべきもので、その作品の良い処を見出し厳正公平に当るべきものであり、その為には戦々競々として万遺漏の無いよう、慎重の上にも慎重に当った積りであります。全審査員が和気暖々の中に意見が一致して鑑別審査が出来たことはこの上なく有難いことでした。

本県のレベルは相当高く、会場壁面の都合から、応募点数二百十二点のうち、一〇四点の入選を見ました。(入選率四九・〇%)が、数点の入落を決めるのに難儀をいたしました。壁面の余裕があれば、まだ十点余の入

山崎 大抱

選を加えても良いと思いましたが、仮名の臨書に良いものが少なく、観察の精緻と線の鍛練とが今一步の感が致しました。

決局一〇四点の人選となりました。選に洩れた方々にも相当の作があり、壁面の関係からやむなく下したのは胸の痛む思いでした。

入賞作選別に際しましては、各部門から優秀作品を数点ずつ

審査に思う

昨年度の芸術祭書道部門では浅学の身でありながら審査員を命ぜられて、事の重大さに身の引きしまる思いと責任を痛感しました。

審査以前の問題として、まず審査員にふさわしい作品を発表しなければ、人様の作品を云云することはできないと考え、制作にあたり例年になく苦慮したが、負い物に思ふにまかせず、結局初めのころの作品を、お目にかけることになったわけ

選び出し、入賞候補として二十数点を挙げました。芸術祭賞一、準芸術祭賞二、芸術祭奨賞五、計八点を決定しましたが、あと数点賞が欲しい気が致しました。以下入賞者を挙げてみます。

芸術祭賞	松本 宜馨氏
準芸術祭賞	村松 慎介氏
準芸術祭賞	桜井 敬明氏
奨賞	丸山 曉鶴氏
奨賞	篠原 殊寛氏
奨賞	澤田 寛氏
奨賞	小室 園氏
奨賞	五江 潤充氏

長島 石城

です。

さて、審査は、山崎大抱先生、高橋日傳・白石宙和・百目鬼賢各先輩の先生方と一緒に、的を得たので、一団体の利益代表ではないので、公正無私の立場で、厳正に良識ある審査ができたと思っております。

ともあれ、人を裁くのと同様に作品の是非を決定することは、むずかしいものです。今後は、貴重な経験を生かして巾の広い勉強をしてゆきたいと考えてお

ります。

皆様のご指導をよろしくお願いいたします。

書道誌紹介

書道

主幹 小平 翁鶴

書は心芸なりを規範として創立、昭和十五年十一月(書道)第一号発刊、本年六月を以て通巻五〇〇号記念号として創巻、全日本書道展風誌上展を記念として開催誌上に発表、常に本会は青少年の情操教育をモットーに日本伝統の書美を世人に広め、特に学生諸賢の社会に出てからの役立つ中正書道を試与する念願で指導。

誌本は毎月一日付を以て、書道誌を発刊す、会の行事は三年に一度、全日本書道展覧会を開催施行、次に本会内員諸先生の連月書研の交換により会の充実を計る。

本会々費(書道)一ヶ月三〇〇円(送料含)六ヶ月一、八〇〇円、以上指導共。

指導内容(書道)連月競書成績発表、翁鶴主幹手本、楷書、行書、草書、かな手本、ペン習字外随筆指導。

本会は書を愛好する人々の為

に入り易く学び易く流派に拘泥せず健全なる書技に向い上達進捗の為に書芸研究に協力貢献します。(書道)発行に当りては、

小平翁鶴会長を主体に本部内員中島千秋、金谷松江、宮崎秀嶺、伊沢鶴鳳、仁平静峯、塚本龍涛、小沢秀鳳、菊地淡月、溝口柳鶴、外二十余名合同の思考と小平桂堂、同桂鶴両氏の研修編集に当たっています。書友先生にお願い本会も今後一層捲土重来を期し健闘、御指導ご鞭撻を願います。入会の場合(書道)会費六ヶ月に住所氏名明記申込下さい。陵風書道会本部 宇都宮市西川田町一四 振替宇都宮九一六二〇

墨 心

昭和二十五年一月、書道を中心とし、日本独特の修養と趣味を普及、会員相互の親睦を図ることを目的として前会長岩沢漢石が、書道研究墨心会を創立し発刊致しました。

以来回を重ね、現在第三十四巻第四〇二号を発行、昭和五十七年六月岩沢漢石他界した後岩沢松涛が継承し、津賀沼秀雲、春山翠石、鉄川蓬春、高橋水雲、波多野言石、岩瀬柏亭、松島春萌、川島淙石、吉田芳石、永浜

陽石、小暮園、川原井静園、島田草園、漆原常石諸先生の協賛を得て編集しております。

本会 は古典臨書の研究に重点をおき、会員の向上に努めております。

会の行事として春に第八回同人展、秋に第三十四回墨心全国展を織物会館にて十一月二十六日、二十七日に開催します。

本部 足利市大町五の九

岩沢 松涛

社中だより

書游会栃木蘭契社

齋 藤 笙風

書游会主幹浅香鉄心の門下生達が、現在全国十七カ所に書游会各地蘭契社を地区組織として結成され、その一つとして栃木蘭契社があります。

六年前に結成され、主幹に直接指導を受けておる会員十六名で構成され、準会員として六十余名があり、お互いの切磋琢磨と融和を目的として、和気暖々の中に今日に到っております。一年間を振り返ってみますと展覧会の連続で、連盟展、芸術祭、下野の書展、書游会蘭契社

展(銀座十字屋ギャラリー)、日本書作院同人展、同東京展、同二科展、毎日日本の書展、日展への挑戦、そして栃木蘭契社展その他一部の人、栃木県美術の現在展、日本の書展選抜展、日本の書女流展等と追われております。

慢然と筆をとって書くというより、中央展に向って、他の社中の方々と競争し、前回よりも今回の方がと努力を重ね書き込んでおりますが牛歩の如く、未熟の若い人達の集りで師風の作より脱皮出来ず、主幹に毎回気合を入れられております。

今年に一度の栃木蘭契社展も、今年は第五回目になりますので一区切りとして、新たな構想を予定しておりますが、特に県内諸先生のご協力を賜わりたいと考えて居ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

猶興社展について

川上 尚雲

社中の中から展覧会を開催してはとの話が出たのが五二年の夏、その秋さやかながら第一回展を持ち本年第七回展を迎えるに至った。書苑には種々雑多な種苗が集められた。折角の種苗も、不肖の不健康なため研究

会研修会練成会といったことは殆ど開かなかつた。育成管理に不十分な点が多かつた。この素地の姿をご覧いただいて御指導御鞭撻をたまわりたい後記の通り展覧会を開催いたしますので是非御来観の程御願ひ申し上げます。

場所 大田原商工会議所

期日 十月八日、九日

川上尚雲記

書泉会

柿沼 梨流

会員三十名をもつて構成されております。職種、年令は、バラバラですが、古典追求の姿勢だけは一貫していると思っております。特に「古法」に目標をおいて、模索なれど牛歩をつづけております。発表の場は、一月に、ひらかれる独立本展と秋に予定している社中展に、しぼって勉強を続けております。

練成会も、年三回を目標に行っており、すこしずつ会としての体裁を、ととのえてきつつあるとおもっています。昨秋の社中展には、はるばる、七海連盟会長、白石副会長、その他の先生方の御来駕をいただき懇切な御指導と激励のお言葉をいただき会員一同、今後の勉強の大きな

群馬県展を見て

昭和57年10月17日(日)

大谷津 昭 男

中ですが、やがて小さな花をつけることができればとおもっています。諸先輩の御指導をおねがいいたします。

収蔵室など完備。

十二メートルをこの建物空間のスケールとして、立方体を連結するという方法で巨大空間を作りだしている。展示室、ホールなど各所に空間の拡張が見えられた。

会期は二週間、運営委員、三名、審査員は、各部門にわかれ、計四四名、二百名程の審査員中より運営委員会にて入選、中央より審査員を招く等のことは、第一回展より行っていない。第一部(漢字)、第二部(かな)、

第三部(墨象)、第四部(近代詩文、少字数)、公募総数、一、三二六名、委嘱、一八五、委員、二〇六、合計、一、七二七名。公募の落選二五%、委員と特別賞入賞作品をのぞき、他は委嘱、秀作、一般、入選と全てを掛けがえとした。

十月十七日(日)、秋、暁々の天候、東武宇都宮駅西口、午前八時集合、群馬県立近代美術館で開かれている県書道展見学のため、栃書連の仲間四十数名が参加。東野バスにて宇都宮を予定時刻よりやや遅れて、八時四十分出発。鹿沼ICから佐野、足利、桐生、駒形、玉村から高崎市岩鼻町、現地到着、十一時五十分。

旧東京第二陸軍造兵廠岩鼻製造所跡地に、美術館、博物館が建てられた。広大な土地、繁茂する平野林をいかし、公園を造設、芝生の広場、森の自然に調和した明るい感じの極めて環境のよい場所に建っていた。建設費総額は九億三千七百万、建築面積、四、四七九平方メートル、地上二階、一部三階建、展示室、ホール、普及研究室、管理室、

古舟老迂

身

「昨年、若葉が燃えた。妻に教えていた。妻に立つべらんだ」と、

楓を見て、珍らしいことがあるの
と云われた。生え茂る楓に変わりは
ない、何が珍らしいのか見当
がつかない。

アソコ、木の又のところにね
と、庭の楓の、二階の上屋根位
のところにある枝を、仰ぎ見な
がら指差した。十五センチ位も
あるうか、丸まった藁や木屑な
どの塊りのようなものが見えた。
巢だなと直感した。

ホラ、ヒナの声が聞えるでし
ょう、時どき親鳥が餌を運ん

で来るの、山鳩の雄と雌とほこらしげに妻は説明した。確かに珍らしい、今までになかったことだ。好奇心が手伝って私は、屋根に梯子を掛けて、遠くからソウツト巢を覗いた。ヒナが黄色い嘴を盛んに動かしている。ほどなく親鳥が餌をくわえて来て口移しにした。その後、のぞき見を繰り返すうちに、ヒナと一緒に巢籠っている親鳥の警戒するかのような緊張した姿も見えた。二週間も経つたろうか居なくなつた。巢立ちしたのだろうか。巢は元のままである。

今年も、つい四、五日前のこと。物置同然の二階座敷の整理整頓が終つた。たまにはこもも開けて陽を入れようと、西窓の雨戸に手を掛けようとした時、娘が急に立ち塞がり、窓際の隙間をのぞきながら外側の戸袋の下隅を指した。奥まつた薄暗い処に、巢に入つたヒナが大きく口を開いて首を振っている。なに鳥だらう、雀か、尾長か、それとも昨年の山鳩か、可愛い声である。こんな窮屈な処に、出してやろうか、餌をやろうかと突差に考えたが、それは却つて追い払うことになる。このまましかないと思ひ直した。親鳥は居ないが、元氣そうなヒナだからセッセと生育に努めている

のだろう。又のぞき見の楽しみが日課の一つとなった。娘は片付け働き中、ヒナの声を耳にして捜し廻つて漸く見付けたが、ソツとして置いたのだと云う。

幼少から小鳥好きの失せない子供じみたお笑ひごとに過ぎなないが、二度も巢造りを見ると、野鳥の安息の場を求める実態に接觸れた思いがし、パン屑や残りの飯粒をやる程度で、こと足れりとしていたのが恥しく、街の狭い庭だとしても、巣箱を設けておいたら、風雨にさらされず物怖じしないで、子育ての場にしたいであらうと悔やまれ、思いやりの足りなさに自省の念を禁じ得ないのである。ましてや我々の社会でもある。

ト野の書展

昭和五十八年

八月二十五日より

八月二十九日まで

上野百貨店新うえの8階催事場

第十回 栃木県芸術祭

第二期書道展

十月二十六日(火)

十一月三日(木)まで

栃木県立美術館

月日(曜)	地名	宿泊
1月1日(火)	東京	浅草
1月2日(水)	東京	浅草
1月3日(木)	東京	浅草
1月4日(金)	東京	浅草
1月5日(土)	東京	浅草
1月6日(日)	東京	浅草
1月7日(月)	東京	浅草
1月8日(火)	東京	浅草
1月9日(水)	東京	浅草
1月10日(木)	東京	浅草
1月11日(金)	東京	浅草
1月12日(土)	東京	浅草
1月13日(日)	東京	浅草
1月14日(月)	東京	浅草
1月15日(火)	東京	浅草
1月16日(水)	東京	浅草
1月17日(木)	東京	浅草
1月18日(金)	東京	浅草
1月19日(土)	東京	浅草
1月20日(日)	東京	浅草
1月21日(月)	東京	浅草
1月22日(火)	東京	浅草
1月23日(水)	東京	浅草
1月24日(木)	東京	浅草
1月25日(金)	東京	浅草
1月26日(土)	東京	浅草
1月27日(日)	東京	浅草
1月28日(月)	東京	浅草
1月29日(火)	東京	浅草
1月30日(水)	東京	浅草
1月31日(木)	東京	浅草

$\frac{8}{8}$ (月)	$\frac{8}{7}$ (日)	$\frac{8}{6}$ (土)	$\frac{8}{5}$ (金)	$\frac{8}{4}$ (木)	$\frac{8}{3}$ (水)	$\frac{8}{2}$ (火)	$\frac{8}{1}$ (月)	$\frac{7}{31}$ (日)	$\frac{7}{30}$ (土)	$\frac{7}{29}$ (金)	$\frac{7}{28}$ (木)	$\frac{7}{27}$ (水)	58年	月日曜
東京(成田)着	上海発	鄭州着	鄭州発	西安着	西安着	太原着	太原着	大同着	大同着	北京着	北京着	北京着	東京(成田)発	地名
	上海泊	上海泊	洛陽泊	洛陽泊	西安泊	小雁塔	西安泊	太原泊	太原泊	大同泊	車中泊	北京泊	北京泊	宿泊

編集後記

原稿の依頼が遅れましたが、
ご多忙のところ、ご協力の先生
方ご寄稿ほんとうにありがとうございます。
ございました。

◇お願い

まだ紹介されていない社中の先生、又は書道誌を刊行されている先生、順次紹介させて頂きますので、三〇〇字〜五〇〇字程度の内要で会長宛、原稿お寄せ下さい。

